

覚一本厳島御幸記事の性質

——『高倉院厳島御幸記』の引用記事から——

郭 順 伊

(一) はじめに

『平家物語』覚一本巻第四「厳島御幸」と「還御」の二章段は、治承四年二月二十一日、皇子言仁親王（後の安德天皇）に讓位した高倉院が、翌月三月十九日、京を出発して厳島を参詣、四月九日に帰京するまでの、高倉院厳島御幸の様子を語る章段にあたる。『玉葉』、『明月記』、『山槐記』、『百鍊抄』などの史料にも、高倉院厳島御幸についての記述が確認できる事は、周知の通りである。言仁親王の踐祚は僅か三歳、高倉院も二十歳という若さであったため、院自ら望んだことではなく、言仁親王の外祖父、つまり親王の母高倉院中宮徳子の父、平清盛による強引な讓位であったとされる。この頃の清盛は、以前は友好関係にありながら、徐々に平家の増大する権力に怪訝を示し、清盛に不信感を抱くようになった高倉院の父、後白河法皇を幽閉するなど、独裁的な振る舞いを見せていた。さらに、高倉院と娘徳子の間に皇子が誕生、帝の外祖父という絶対的な地位の確立が目前にあったのである。言仁親王に讓位した後、高倉院が厳島御幸を決めた背景には、清盛によつて幽閉状態にある父後白河法皇を慮り、平家の信仰が篤い厳島を参詣することで、清盛の心を和らげ、父を苦境から救いたいという、高倉院の心願が籠められていたようである。『平家物語』には、先例にない厳島御幸の理由を、

其上此嚴島をば、平家なめならずあがめうやまひ給ふあひだ、うへには平家に御同心、したには法皇のいつとなう鳥羽殿にをしこめられてわたらせ給う、入道相国の謀反の心をもやはらげ給へとの御祈念のため

(覚一本巻第四「嚴島御幸」)

と、人々が様々に噂をしていた事が記される。

その嚴島御幸の様子を、『平家物語』諸本の中で語り本系覚一本は詳細に記す傾向にある。覚一本の高倉院嚴島御幸記事は、前半「嚴島御幸」に、高倉院の讓位と皇子言仁親王の踐祚、高倉院が都を出立するまでの記事を掲載し、後半「還御」には、嚴島参着後から現地での様子、都に還御するまでを中心に、還御の後、安徳天皇即位までの記事を収載している。前半「嚴島御幸」に該当する内容の多くは、読み本系の延慶本に確認できることから、覚一本作者が古態の「平家物語」諸本の記事を参考に、その内容を受け継ぎながら、覚一本「嚴島御幸」の章段を完成させたと考えられる。しかし、後半「還御」に当たる記事を、『平家物語』諸本は特に仔細な記述で示しておらず、覚一本が最も詳細に語る状況にある。延慶本などは、高倉院の嚴島現地での事柄や、還御の道中の様子などに言及をせず、高倉院が還御したという事項を、簡潔に述べるに留まっている。そのような点から、高倉院の嚴島御幸の様子を最も詳しく語るのが、覚一本であろうとされている。そして、覚一本嚴島御幸記事には読み本系諸本に見られない特徴として、嚴島に随行した源通親の、『高倉院嚴島御幸記』(以下「御幸記」)を資料に用いて、描かれたと思われる場面がいくつか確認できるのである。この事については赤堀又次郎氏が「平家物語解題」中で、「御幸記」を『平家物語』の「基となる書」として指摘し、文部省国語調査委員会編纂による「平家物語考」も、赤堀又次郎氏の論を引用し「御幸記」との関係について、言及している。後藤丹治氏は「御幸記」と「平家物語」の類似する記事を挙げ、「御幸記」が「平家物語」の「比較的重要な出典の一つ」であると位置付けをされた。また水川喜夫氏が「源通親日記全釈」

において、「御幸記」と「平家物語」の比較を詳細に検討されている。覚一本の高倉院御幸記事には、「御幸記」から取り入れたであろう箇所が確認でき、一方、「平家物語」読み本系諸本には「御幸記」の影響が見られず、覚一本作者が「御幸記」も参考にしながら、高倉院巖島御幸に纏わる記事を完成させたという考えが一般的であった。さらに、近年では小川剛生氏が「御幸記」の祖本とされる梅沢本の語句や登場人物の呼称、官位表記などに着目し、「御幸記」原本は後人による大幅な改修が加えられ、そこから成立したのが梅沢本であるとの見解を示された。さらには、それは当時読まれていた「平家物語」と相補う形であり、平家の時代への関心が高まっていた背景を受け、「平家物語」から得られる知識に基づく改変がなされ、高倉院を主人公とする物語というべきものとなった。通親の個性は希薄となり、辛うじて源氏公卿としての面影が感じられる程度で、語り手としての地位に後退している。原作はその後失われた。覚一本をはじめとする語り本系諸本は改作本の「御幸記」をそれぞれの立場で引用、潤色した。

と、本来あつた「御幸記」の原作は修正が施され、現在読まれている「御幸記」梅沢本が成立する過程には、「平家物語」読み本系諸本からの影響も想定できるとの考えを示されたのである。(注)小川剛生氏の論から、「御幸記」と「平家物語」読み本系諸本には、梅沢本が成り立つまでの密接な増補関係があつたと考えられるが、本稿では覚一本を取り扱うため、覚一本巖島御幸記事の成立過程は、古態の「平家物語」諸本を受け継ぎながら、新たに「御幸記」を参考に、さらには覚一本のみの記述を設けることで、独自の巖島御幸記事が完成したとの前提に進めていく。

以上の点をふまえながら、本稿では覚一本巖島御幸記事が、資料に利用したとされる「御幸記」との比較を通し、覚一本が如何なる場面で「御幸記」の記事を取り入れ、どのように利用しているのかを考察し、その結果、覚一本巖島御幸記事に見られる特質を明らかにしていきたい。

(二) 踐 祚 記 事

覚一本が、嚴島御幸記事を成立するにあたり、「御幸記」の記事を取り入れた事が特徴的であることは、先述した通りである。「御幸記」について簡略ではあるが、概要を記しておく。「高倉院嚴島御幸記」は、「土御門内大臣日記」、「源通親日記」とも称され、高倉院嚴島御幸の詳細を記す紀行文である。作者は高倉院の近臣として、嚴島御幸に随行した源通親。久安五年の誕生で、嚴島御幸が行われた治承四年には三十二歳、参議兼左近衛權中将中宮權亮、新院別当に補されている。後に内大臣右大将となり、土御門内大臣と号した。建仁二年五十四歳で没している。

まず、覚一本嚴島御幸記事の前半「嚴島御幸」を見ていく。「嚴島御幸」の内容は、大きく五つの場面に区分される。

へ1へ 治承四年正月、幽閉状態の後白河法皇について言及。

へ2へ 二月二十一日、春宮踐祚の儀。

へ3へ 新帝誕生に対する世評。

へ4へ 三月上旬、高倉院嚴島御幸の公表。嚴島御幸に対する山門大衆の反発。

へ5へ 高倉院と後白河法皇、御幸前に対面。高倉院、都を立出。

以上、へ1へからへ5への中で「御幸記」の参照記事が顕著に確認できるのは、へ2への二月二十一日、春宮踐祚の儀における描写である。以下に、へ2へに該当する二月二十一日の覚一本と、「御幸記」の記事を引用する。(後)

覺一本

二月廿一日、主上ことなる御つ、がもわたせ給はぬを、をし
 おろしたてまつり、春宮踐祚あり。これは入道相国よろづ思ふさ
 まなるが致すところなり。時よくなりぬとてひしめきあへり。
 A内侍所、神璽、宝剣わたしたてまつる。上達部陣に集つて、
 ふるき事も先例にまかせておこなひしに、弁内侍御剣とつてあ
 ゆみいづ。清涼殿の西おもてにて、泰通の中將うけとる。備中の
 内侍しるしの御箱とりいづ。隆房の少將うけとる。内侍所、しる
 しの御箱、こよひばかりや手をもかけんと思ひあへりけむ、内侍
 の心のうちども、さこそはとおぼえて、あはれおほかりけるな
 かに、しるしの御箱をば、少納言の内侍とりいづべかりしを、こ
 よひこれに手をもかけては、ながくあたらしき内侍にはなるま
 じきよし、人の申けるを聞いて、其期に辞し申てとりいでざりけ
 り。年すでにたけたり、二たびさかりを期すべきにもあらずと
 て、人々にくみあへりしに、備中の内侍とて、生年十六歳、い
 まだいとけなき身ながら、その期にわざとのぞみ申てとりいで
 ける、やさしかりしためしなり。つたはれる御物ども、しな
 くつかさくうけとつて、新帝の皇居五条内裏へわたしたて
 まつる。B閑院殿には、火の影もかすかに、鶏人の声もとゞま

【御幸記】

如月の廿日あまりにや、春宮に位譲りたてまつり給て、A内
 侍所、神璽、宝剣渡したてまつられし夜こそ、日ごろおほしめし
 とりしことなれど、心ほそき御気色見えしか。宮人も限りなくあ
 はれつきせざりしが、空の気色もかきくもり、残りの雪、庭もま
 だらにうちそ、きて、暮れ方になりしほど、A上達部陣に集り
 て、あるべきことども、古き跡に任せて行はれしに、宣旨うけ
 給はりて陣に出でて、御位譲りのこと、C左大臣仰せしを聞き
 て、心ある人袖をうるをして、何となく思ひ続けること色に出
 でたる、その中にとりわき心ざし深き人にな、かくぞ思ひ続け
 ける。

かきくらし降る春雨や白雲のおる、なごりを空にをしめる
 時よくなりぬとて、何となくひしめきあひたり。

A弁内侍、御佩刀取りて歩み出づ。清涼殿の西面に、泰通の中
 將受け取る。備中の内侍、璽の箱取り出づ。隆房の中將取りて、
 近き衛のつかさ立ち添ひて出づ。年ごろ近く候て持ち扱ひし御
 佩刀、璽の箱、今夜ばかりこそ手をも触れめと思ひ続けけん内
 侍の心のうち、思ひやられてあはれなり。C儲の君に位譲りたて
 まつりて、藐姑射の山のうちも閑かになど、おほしめすま、な

り、滝口の文爵もたえにければ、ふるき人々こゝろほそくおほえて、めでたきわいのなかに、涙を流し心をいたましむ。

C 左大臣陣にいでて、御位ゆづりの事ども仰せしを聞いて、心ある人々は、涙を流し、袖をうるほす。われと御位を儲の君にゆづりたてまつり、麻姑射の山のうちの閑になんどおほしめすさきくゞだにも、哀はおほき習ぞかし。況やこれは御心ならずをしおろされさせ給ひけん、あはれさ申もなかゞおろかなり。

るべきだにあはれも多かるに、まして心ならずあはれなるらん先くの有様、思ひやらる。

内裏のことどもはてて、夜も明方になりしほどに、人く返まいりて、何となくB火の影もかすかに、人めまれなるさまになりて、涙とゞまらぬ心地するに、院号仰せられて、殿上始め何くれ定めらる。B鶏人の声もとゞまり、滝口の間籍も絶えて、門近く車の降り乗りせしも、ひが事のやうにぞおほえける。その頃、閑院の池のほとりの桜初めて咲きたるを見て、

九重のにはひなりせばさくらばな春知りそむるかひやあらまし

覚一本「二月廿一日」と、「御幸記」「如月の廿日あまり」の、言仁親王踐祚の儀の描写である。『平家物語』読み本系諸本には踐祚の様子は描かれておらず、覚一本作者が、『御幸記』の記事を参考に取り入れながら、設定した場面であることが分かる。Aの箇所にあるように、儀式を執り行つた「泰通」、「隆房」、「弁内侍」、「備中の内侍」らの名を挙げ、儀式に際し三種の神器を運び出す様子や順序など、まとまった一部分の記事が、『御幸記』に依つた内容で記されている。また、B「火の影もかすかに」、「鶏人の声もとゞまり、滝口の間籍も絶えて」(『御幸記』)を、「火の影もかすかに、鶏人の声もとゞまり、滝口の間籍もたえにければ」(覚一本)と表現し、またC「左大臣仰せしを聞きて、心ある人袖をうるをして」、「儲の君に位譲りたてまつりて、麻姑射の山のうちも閑かになど、おほしめすま、

なるべきだにあはれも多かるに」(「御幸記」)を、「左大臣陣にいでて、御位ゆづりの事ども仰せしを聞いて、心ある人々は、涙を流し、袖をうるほす。われと御位を儲の君にゆづりたてまつり、麻姑射の山のうちの閑になんどおほしめすさきぐだにも、哀はおほき習ぞかし」(覚一本)とする表現に見られるように、「御幸記」では分散して載せる文言を、覚一本では一つの文辞に組み合わせ引用するなど、「御幸記」を資料に用いて記したと思われる記事が多く確認できる。

覚一本が「御幸記」に依った、「二月廿一日」の記事は、爾々と執り行われる踐祚の儀式の中に、内侍たちの物悲しい様子や、高倉院に長く仕える者達の沈痛な思いが描かれている。「ふるき人々こゝろほそくおほえて、めでたきいわいのなかに、涙を流し心をいたましむ」(覚一本)というように、新帝誕生の祝賀と同時に、帝の位から立ち去って行く高倉院の寂寥とした雰囲気伝わってくるであろう。覚一本は、「二月廿一日」の記事の冒頭で、高倉院の讓位と春宮踐祚を、「これは入道相国よろづ思ふさまなるが致すところなり」と、清盛の思惑によって成立した皇位継承である事を前提とし物語を進めている。この覚一本の記述は、以下の延慶本に依拠したものであると考えられる。

二月十九日ニ春宮御讓ヲ受サセ給フ。今年纔二三歳ニゾナラセ給フ。イツシカト人思ヘリ。先帝モ殊ナル御ツ、ガモヲハシマサヌニ、ヲシヲロシ奉ラル。是ハ大政入道万事思フサマナルガ所致也。

(延慶本第二中「春宮御讓ヲ受御ス事」(注))

源平盛衰記もまた、「是モ太政入道ノ万事思様ナル故也」ト、人々私語傾申ケリ。」との記述を設けており、高倉院の讓位と安德天皇即位が清盛のもくろみであった事は、周知の事実として捉えられていた。言仁親王の踐祚という祝い事とは対照的に、清盛の圧力によって強制的に讓位した高倉院と、高倉院に仕えていた人々にとっては、あまりに辛い状況であると言える。「平家物語」読み本系諸本は前述したように、清盛の策略であることを明確に記し、高倉

院にとつて不本意な讓位であつた事は言うまでもない事実としてゐるが、高倉院側の不憫な様子を具体的に踐祚の儀を通して描写するまでには至つていないのである。

前記した小川剛生氏の論文中にも取り上げられるが、『徒然草』第二七段に文保二年（一二三二）一、花園院讓位についての記述がある。

御国ゆづりの節会おこなはれて、劍・璽・内侍所わたし奉らるるほどこそ、限りなう心ほそけれ。

新院のおりさせ給ひての春、詠ませ給ひけるとかや、

殿守のとものみやつこよそにして掃はぬ庭に花ぞ散りしく

今の世のことしげきにまぎれて、院には参る人もなきぞさびしげなる。かかる折にぞ、人の心もあらはれぬべき。

殿守さえもいなくなり掃除をされないまま庭に散り敷く桜を通して、讓位した花園院が、「殿守のとものみやつこよそにして掃はぬ庭に花ぞ散りしく」の歌を詠じてゐる。伺候する者が離れてゆき、身近な者たちが遠ざかつていく状況は、讓位した者にとつて辛く耐え難い事であり、また、側に誰もいないという事が、花園院の孤独や寂寥感をさらに印象付ける。覚一本が描く高倉院の場合、その身近な者達を中心である踐祚の描写があり、高倉院の讓位に対する心細さや痛ましさ（注）が描かれているのである。諸本からは窺い知る事が出来なかつた実情を、『御幸記』を通して知り得た覚一本作者が本文に取り込む事で、自らの意思ではない讓位によつて帝の位を退いた高倉院と、その高倉院の身近な者達の悲嘆を、嚴肅に行われる踐祚の儀式の中で垣間見ることが出来る。伺候する者の嘆きや内裏の静けさを通して、また「況やこれは御心ならずをしおろされさせ給ひけん、あはれさ申もなか／＼おろかなり」（覚一本）と締めくくる事で、高倉院側に同情を寄せ、清盛の支配下にある痛ましい状況をより強調する効果のある、『御幸記』の記事を利用したと考えられる。

ところで、覚一本へ2の場面には点線で示したように、内侍に纏わる記事が独自に設けられている。この内侍の記事は、延慶本など『平家物語』読み本系諸本には確認出来ない記事であり、語り本系諸本でも覚一本と百二十句本だけが有する記事である。『御幸記』では劍璽を運ぶ内侍らの胸中を、「今夜ばかりこそ手をも触れめと思ひ続けけん内侍の心のうち、思ひやられてあはれなり」と通親が察し、哀れんでいる心中が記されている。覚一本もこの描写を受け、「こよひばかりや手をもかけんと思ひあへりけむ、内侍の心のうちども、さこそはおほえて、あはれおほかりける」と、『御幸記』と同様の内容を記しているが、点線箇所に見られるように、引き続き『御幸記』には記されていない、備中の内侍が璽の担当に就いた経緯を以下のように語っているのである。

しるしの御箱をば、少納言の内侍とりいづべかりしを、こよひこれに手をもかけては、ながくあたらしき内侍にはなるまじきよし、人の申けるを聞いて、其期に辞し申てとりいでざりけり。年すでにたけたり、二たびさかりを期すべきにもあらずとて、人々にくみあへりしに、備中の内侍とて、生年十六歳、いまだいとけなき身ながら、その期にわざとのぞみ申てとりいでける、やさしかりためしなり。

(覚一本巻第四「嚴島御幸」)

当初、璽の担当を司るはずの少納言の内侍が、「こよひこれに手をもかけては、ながくあたらしき内侍にはなるまじき」と直前で役目を辞退した事により、僅か十六歳の備中の内侍が、自ら志願して任を務めたという経緯である。既に若くない少納言の内侍が、なおも内侍の職に未練を残し、譲位する高倉院の内侍として三種の神器に触れる事を拒否、直前で役を辞した事に対し、「年すでにたけたり、二たびさかりを期すべきにもあらず」と周囲の人々は批判的であった。一方、備中の内侍に対しては、年配の内侍が辞退した役を十六歳の若さで自ら志願し遂行した姿に対して、「やさしかりためしなり」と評価をしている。言仁親王の踐祚で劍璽の役を務めた「弁内侍」と「備中の内侍」について、『踐祚部類抄』に内侍の詳細な名は確認出来なかつたが、『山槐記』に弁内侍を「故前筑前泰兼朝臣女」、備

中の内侍を「前和泉守季長朝臣女」として記述がある。しかし、覚一本が語る内侍の交替などについては記されていない。そして、『玉葉』には次のような記事がある。

今日女房等余に問ひて云はく、明日劔璽を取り次將に授く内侍の装束、節会の儀かへ纈纈を用ふと云々、行幸の儀かへ紫末濃と云々。余知らざる由を答ふ。但し事の理を案ずるに、行幸の装束を用ふべきなり。女房云はく、先づ節会の召しあるべし。仍つて件の内侍装束を改めず、役すべきかの由、人々不審なりと云々。この条又尤も然るべし。但し主上南殿に渡御すべし。仍つて只内侍一人を召す。節会の装束を着くべし。今一人は然るべからず。仍つて兩人装束相違か。然れば行幸の装束宜しかるべきか。猶人々に問はるべき由これを答ふ

〔玉葉〕治承四年二月二十日条

兼実が内侍の衣装について女房らに尋ねられ、思案するが結果内侍二人の装束が相違するという状況があつたようである。『玉葉』には装束を巡る内侍の記事を見る事は出来るが、やはり覚一本の記事と一致する内容ではない。覚一本が設ける内侍の記事は史実として確認する事が出来ず、また、『平家物語』古態の延慶本などにも見られないため、物語の本筋とは直接関係のない独自の増補記事だと考えられるが、覚一本作者の全くの創作であるか、典拠とした資料があつたのかは不明である。しかしながら、『平家物語』よりも時代は下るが、『中務内侍日記』などにも見られるように、踐祚や踐祚に続く諸般の行事の中で、段取りを司る裏方役の内侍らには公式行事とはまた別に、裏方でしか知り得ない様々な出来事や事情が起こつていた事は想像できる事である。覚一本は古態本の『平家物語』には描かれない、皇位継承に関する高倉院の身近な者達の悲哀と、その詳細な様子を『御幸記』から取り込み、さらに独自の内侍の逸話を設けた構成で、治承四年二月廿一日の記事を成立させているのである。

(三) 高倉院、後白河法皇の対面

〈2〉に続く覚一本「殿島御幸」〈3〉、〈4〉、〈5〉の場面は、延慶本に同様の内容が見られ、「御幸記」からの影響は特に窺えない事から、覚一本が「平家物語」諸本に依って記したものと判断できる。〈3〉では、安徳帝即位に危惧の念を抱く周囲の反応と、帝の外祖父という権力を手に入れた清盛の栄華を記し、〈4〉では、讓位した高倉院の先例にない殿島までの御幸に対し、人々が「安芸国までの御幸はいかに」（覚一本）と、不審に思う様子が記されている。西国殿島までの御幸の理由を、(一)にも記したように、「うへには平家に御同心、したには法皇のいつとなう鳥羽殿にをしこめられてわたらせ給う、入道相国の謀反の心をもやはらげ給へとの御祈念のため」（覚一本）と、平家の信仰篤い殿島を参詣することで、清盛の心を和らげ、幽閉状態の父後白河法皇を救いたいという祈りが籠められていると語る。延慶本では〈4〉に該当する場面で、「入道殊ニ殿嶋ヲ崇給ケル由来ハ」と、清盛の殿島信仰由縁説話を設けている。これは、覚一本巻第三「大塔建立」にあたり、清盛の殿島崇拜のきっかけを語る章段である。延慶本は高倉院の殿島御幸と関連させ清盛による殿島信仰の発端を記すが、覚一本は御幸記事の中では殿島由縁には触れず、御幸記事よりも前の巻第三で中宮徳子の懐妊、皇子出産の付属説話として「大塔建立」を配置している。(注1)その他、〈4〉には先例にない殿島御幸に対して、比叡山延暦寺の衆徒が憤慨し、御幸を延期した事情が記されており、その事実は、「玉葉」(注2)などにも確認できる。そして、「御幸記」では通親が次のように記述している。

位降りさせ給ては、賀茂、八幡などへこそいつしか御幸有に、思ひもかけぬ海のはてへ浪を湧きて、いかなるべき御幸ぞと歎き思へども、荒き浪の気色、風もやまねば、口より外に出す人もなし (御幸記)

清盛に憚った御幸である事は直接的に言及していないが、「荒き浪の気色、風もやまねば」の解釈を、「新日本古典文学大系 高倉院殿巖島御幸記」の注釈では、「後白河法皇を鳥羽殿に幽閉して、さらに高倉院を讓位せしめた、入道相国清盛の暴君的権勢を諷して」とあり、前掲した『源通親日記全釈』の中で水川喜夫氏は、「口より外に出す人もなし」の言葉を、「旅をせねばならない事情に対する嘆きや憤り」を、口に出さないと解釈されている。通親は、直接的に清盛による強制的な讓位や、高倉院の憚りを記すことはしていないが、その一方で、清盛批判、例外的な巖島までの御幸に対する不安感を、婉曲的に伝えようとしているのである。通親が遠まわしに示唆する、この度の巖島御幸の背景を、覚一本は諸本に従いながら、独裁的な振る舞いを見せる清盛に対して、父後白河の救済を祈る高倉院の懇願が籠められていたと語っているのである。

さて、巖島へ出立する前に高倉院と後白河法皇の対面がへ5の記事に描かれているが、これもへ3へ、へ4と同じく延慶本に同一の場面が載っている。へ5の場面は三月十七日から都を發つ十九日にかけての記事であり、『御幸記』にも同日付に相應する記事が確認できるが、覚一本とは全く異にする内容なのである。以下に、へ5に該当する三月十七日からの覚一本と、『御幸記』の記事を引用する。

覚一本

同十七日、巖島御幸の御門出とて、入道相国の西八条の亭へいらせ給ふ。其日の暮方に、前右大将宗盛卿を召して、「明日御幸の次に、鳥羽殿へまいって、法皇の見参に入ばやとおほしめすはいかに。相国禪門にしらせずしてはあしかりなんや」と仰け

【御幸記】

ながき春日もはかなく暮れて、十七日に宮を出させ給べきにてありしに、山の大衆何くれと申すと聞えて、静かならざりしかば、今日は八条殿へ御門出とあるべしとて、八条大宮の二位殿もとへ御幸あり。何となく浪の浮巢に揺られ歩きて、夢か夢にあらざ

れば、宗盛卿涙をはら〜と流ひて、「何条事か候べき」と申されければ、「さらば宗盛、其様をやがて今夜鳥羽殿へ申せかし」とぞ仰ける。前右大将宗盛卿、急ぎ鳥羽殿へまいって、此よし奏聞せられければ、法皇はあまりにおほしめす御事にて、「夢やらん」とぞ仰ける。

同十九日、大宮の大納言隆季卿、いまだ夜ふかうまいって御幸もよほされけり。此日ごろ聞えさせ給ひつる巖島の御幸、西八条よりすでにとげさせおはします。弥生もなかば過ぎぬれど、霞にくもる在明の月は、なをおほろなり。越路をさして帰る雁の雲井におとづれゆくも、折ふしあはれにきこしめす。いまだ夜のうちに、鳥羽殿へ御幸なる。

門前にて御車よりおりさせたまひ、門のうちへさしいらせ給ふに、人まれにして木ぐらく、物さびしげなる御すまひ、まづあはれにぞおほしめす。春すでに暮れなんとす。夏木立にも成にけり。梢の花色をとろえて、宮の鶯声老たり。去年の正月六日のひ、朝覲のために法住寺殿へ行幸ありしには、楽屋に乱声を奏し、諸卿列に立って、諸衛陣をひき、院司の公卿参り向つて、幔門をひらき、掃部寮縁道をしき、たゞしかりし儀式、一事もなし。けふはたゞ夢とのみぞおほしめす。重教の中納言、御気色申され

るかとのみ、公私思ひあひたるなごりもいかにと、「あらぬ別も」など、あながちげに申たりける人のわりなさに、内裏へ暇申さむとてまいりしたよりに立入て、定めなき世の遅れ先立つためし、旅の空のあはれさなど申合せつ、おほろなる月影ほのかにさし入て、窓の梅の散りすぎたる木ずゑにとまれるなごりばかりに、風のたよりにほのめかしたる、言ひつくしがたし。程なく夜もや、ふけぬるよし、いさむる声に催されて立ち出づるとて、書き付けける。

目のまへにとまらぬものは今ほとと立ち出づる程の涙なりけり
思ひやれ都の空をながめても八重の潮路の旅のあはれさ

八条殿へ「御幸いそがるべし」と聞ゆる御使まいりなどしつ、
「ならはせたまはぬ旅の空おほつかなき」など申させたまひける。
隆季大納言まいりて、「御幸催しぐして候」など勧め申あはれに、
「御供すべき人、みな舟にまいるべし」とて、草津といふ所に平
張打ちて、まいりまうけたり。隋帝の錦の纜にて繋ぎたりけん船
には変りたれども、心ことにひきつくるひたり。御船ども、峰の
嵐に色〜の木葉汀に散りしきたるやうにうち散らしたり。大方
声どもは梢の蟬の夏深き心地して、御供の女房たち御船にまいる。
立ち寄りて沙汰し乗せても、「いかなるべき旅の御遊ぞ」と、言

たりければ、法皇寝殿の橋がくしの間へ御幸なつて待まいらつさせたまひけり。上皇は今年御年廿、あけがたの月の光にはへさせたまひて、玉体もいとゞうつくしうぞ見えさせおほします。御母儀建春門院にいたく似まいらつさせたまひたりければ、法皇まづ故女院の御事おほしめしいでて、御涙せきあへさせたまはず。両院の御座ちかくしつらはれたり。御問答は人うけたまはるるに及ばず。御前には尼せばかりぞ候はれける。や、久しう御物語せさせ給ふ。はるかに日たけて、御暇申させ給ひ、鳥羽の草津より御舟に召されけり。上皇は法皇の離宮、故亭幽閑寂寞の御すまひ、御心ぐるしく御覧じをかせたまへば、法皇は又上皇の旅泊の行宮の浪の上、舟の中の御ありさま、おほつかなくぞおほしめす。まことに宗廟・八幡・賀茂などをさしをいて、はるぐくと安芸国までの御幸をば、神明もなか御納受なかるべき。御願成就疑ひなしとぞ見えたりける。

先述したへ2の踐祚記事のように、「御幸記」を参考としたであろう記述は、へ3、へ4、も含め、ここで取り上げるへ5の場面にも認められないのである。覚一本では十七日に平家の別邸西八条に参つた高倉院が、宗盛に「明日御幸の次に、鳥羽殿へまいって、法皇の見参に入ばやとおほしめすはいかに。相国禪門にしらせずしてはあしかりなんや」と、父後白河との対面を所望し、その悲願が叶って御幸前に親子の対面が成就するという場面である。

忌みもせず歎きあはれたるを、「御門出に」など諫むる心の中にもたゞならず。

日さし出づる程に御幸なる。殿上人十余人、上達部七八人ばかりにて、御直衣にてぞおほします。御車さし寄せて、御船にたてまつる。閑院の池の舟などこそたてまつりならひしか、いつかはか、る道にも御覧せむとぞ覚ゆる。御船に立ち去るまじきよし仰せ言ありしかば、御前には御送りの人も、岸に並みゐたり。

巖島御幸そのものよりも、薄幸な状況にある父子の再会に主眼があると捉えて良いだろう。覺一本は三月十七日から十九日にかけての記事を、資料とする「御幸記」よりも、延慶本などの「平家物語」諸本に依りながら、御幸前の親子の対面に重点を置き、執筆したのであろうと考えられる。例えば、「御幸記」十七日の記事では、高倉院は御幸前に八条大宮の二位殿の許へ向かっている。しかし、そこで高倉院の具体的な言動について記述はなく、作者通親が恋人の三条殿（建春門院女房）と、出立前に最後の別れをする傍線部の記述に多く筆が割かれている。当然ながら、これは通親の私的な事柄であるため、覺一本は記事として取り込んではいないが、出発目前の船場での様子や、女房達の「いかなるべき旅の御遊ぞ」（「御幸記」という、旅の先行きを案じる発言なども一切取り上げていないのである。覺一本では出発のその時も、「上皇は法皇の離宮、故亭幽閑寂寞の御すまひ、御心ぐるしく御覧じをかせたまへば、法皇は又上皇の旅泊の行宮の浪の上、舟の中の御ありさま、おぼつかなくぞおほしめす。」と、互いに思いやる父子の深い愛情を描こうとしている。

高倉院と後白河法皇の対面が事実行われたか否かについて、それを示す史料は確認できないが、高倉院が巖島へ出発した三月十九日の「玉葉」の記事に、後白河法皇について以下の記述がある。

今晚上皇御進発了んぬ。法皇去夜五条大宮為行の家に渡御せんとする間、六条壬生の辺へ誰人の宅と知らず、鋪設を設け、御装束を装ふ。法皇その子細を知し食さず。四墓辺に到り給ふ間、前將軍使者を献り、日次宜しからず後日渡御すべき状を申す。仍つて勿に以て鳥羽に還御す。次第奇異の事か。今一兩日の間、猶五条大宮に渡御すべし云々。

（玉葉）治承四年三月十九日条

後白河法皇が、十八日夜から五条大宮の為行の家へ向かう途中、日が悪いという理由で急遽、引き返したという記事である。「次第奇異の事か」と法皇の行動に、兼実も疑問を抱いている。「玉葉」の記事が、鳥羽殿に還御した後白河

法皇と高倉院の対面の可能性を想像させるようでもあるが、直接的に裏付けとなる証拠にはならないため、事実がどうであったのかは定かではない。ただ、覚一本は先に引用したへ5の場面の描写をもって、高倉院厳島御幸記事の前半「厳島御幸」を終えており、清盛政権下の威庄の中で、僅かに与えられた父子の悲願の再会として、高倉院と後白河の対面を重要な出来事として御幸記事に挿入している。

さて、この高倉院と後白河法皇の対面は、「保暦間記」にも記されている。「保暦間記」は作者も成立年代も不明とされるが、跋文直前に作者自ら、「保元以降暦応二至マテノ事ヲ所註ナレハ保暦間記ト可申」と記すように、保元元年から暦応二年の後醍醐天皇死去までを記した史料である。源平合戦に関する記事も多く、そのほとんどが「平家物語」読み本系に依拠している点^(作註)が特徴的であり、佐伯真一氏、高木浩明氏による「保暦間記」慶長古活字本の翻刻など、詳細な研究がなされている。その「保暦間記」に、以下の通り高倉院厳島御幸に関する記事が確認できる。

二月十九日、俄ニ東宮御即位アリ。主上指タルツ、カモ渡ラセタマハス、是ハ何事ソヤト思召。只是、入道万ヲ心ニ任タル故也。此踐祚ノ後ハ、入道二位殿、外祖父外祖母トテ、准三后ノ宣旨ヲ蒙テ、上日ノ者ヲ召仕ケレハ、総カキ花結タル者ヲ出入シテ、偏ニ院中ノコトシ。出家ノ人ノ准三后ノ宣旨ヲ蒙ル事、法興院ノ大入道殿ノ例トソ聞ヘシ。主上、僅ニ三歳ニナラセ給フ。三月十九日、新院、安芸厳嶋へ御参詣アリ。宗盛ヲ召レテ、通様ニ鳥羽殿へ参テ、キト見参ニ入ト思召。是モ入道ニ耳ニ触スハ叶ハシヤトテ、御涙ヲ流サセ玉フソ忝キ。鳥羽殿へ入セ玉ヒテ、法皇、新院、御涙ニムセハセ玉ヒ、良久アツテ、法皇、新院、何事ノ御願ニカ、今日明日ハル／＼ト思召立ツ御事ニヤト申サセ給ケレハ、心中ニ深ク存スル子細候トテ、又御涙ニムセハセ玉フ。穴糸惜シ、我御事ヲ申サセ御座ニコソト思召ケリ。程モ久クナリ、日モタケ、レハ、出サセ玉フ。同二十六日、厳嶋ノ御参詣トケサセ玉ヒテ、同四月一日ニ福原へ入セ玉フ。同九日ニ京へ還御アリ。上ハ平家一体ノテイニテ、下ハ法皇ノ御事

ヲ祈申サセ玉フ。遙ノ海路ヲ凌思食立事、御願成就モ疑ナシ。

(「保曆間記」)

前半は安徳帝即位を期に昇進を重ねる清盛の栄耀を記し、後半「三月十九日」の高倉院嚴島御幸に際しては、記事の中心に高倉院、後白河法皇の対面を扱っている。嚴島御幸に関連する親子の再会以外のほとんどの記事を省略し、清盛の掌中にある高倉院と幽閑状態の後白河法皇が置かれる不憫な状況や、父親を氣遣う高倉院の姿にほとんど主眼を置いているのである。「平家物語」諸本も嚴島御幸に纏わって、高倉院、後白河法皇の再会記事に多く筆を費やしているが、「保曆間記」作者は、さらに「平家物語」を享受し、治承四年三月十九日の事柄を高倉院、後白河法皇再会に特に注目した形で叙述している。佐伯真一氏は「平家物語」の影響を受けながら「保曆間記」は、「独自の歴史叙述を形成」しているとし、また「現実の利害や権威から自由な立場で、作者なりの史観によって、公平一律に歴史上の人物・事件を批評し得ている」と評価(注4)をされている。「保曆間記」作者が公平に独自の捉え方で、「平家物語」高倉院嚴島御幸記事を読んだ時、高倉院、後白河法皇の対面は特に印象に残る事柄であつたろう。物語性が強く史実として確認は出来ないが、「保曆間記」作者が注目したように、覺一本作者もまた、高倉院と後白河法皇の再会に興味を示し、「御幸記」には記されていないが、高倉院の嚴島御幸前の重要な出来事として収載したと考へる。

(四)「還御」

「嚴島御幸」に引き続き、覺一本は「還御」の章段を立て、嚴島到着後、現地での高倉院一行の様子、帰京、安徳天皇即位までを描いている。「還御」の章段は前半「嚴島御幸」と比較し、「平家物語」諸本からの引用箇所がほとんど見られず、多くの記事が「御幸記」に依つて成立している。そもそも、延慶本などは、京を出立し嚴島參着後から

還御するまでの様子を、以下のように簡潔に述べるに留まっているのである。

廿六日ニ嚴島ニ御参着。一日逗留有テ、法花会被行。舞楽ナド有キ。勳賞被行テ、神主佐伯景弘、安芸国司藤原有経、当社別当尊叡、皆官共成ニケリ。神慮ニモ相応シ、入道ノ心モ和ギヌトゾ見エシ。四月七日、新院嚴嶋ノ還御之次ニ、太政入道ノ福原へ入セ給。八日、勳賞被行テ、入道ノ孫右中将資盛、従四位上、養子丹波守清邦、上五位下ニ叙ス。今日ヤガテ福原ヲ出サセヲハシマス。寺江ニ御留リ有テ、九日、京へ入セヲハシマス。御迎ノ人々ハ鳥羽ノ草津へゾ被参ケル。公卿ニハ、右大臣公能公御息、右宰相中将実盛一人也。神王始テ大内へ遷幸アリケレバ、公卿皆ソレへ参給トテ、只一人トゾ聞エシ。其外、殿上ノ侍臣五人ゾ参リタリケル。嚴嶋へ参ツル人々ハ船津ニ留テ、サガリテ京へ入給ニケリ。

(延慶本第二中「新院嚴嶋へ御参詣之事」)

延慶本など『平家物語』諸本から、嚴島での様子を把握する事が困難であるため、覚一本は「還御」の章段の随所に、『御幸記』から取り込んだ事柄を記している。その「還御」の章段を四つの場面に区分する。

〈1〉治承四年三月二十六日、嚴島に参着、嚴島撰社を御幸。

〈2〉都へ出立(三月二十九日)、帰京の道中(四月一日)。

〈3〉福原を経由し、都に還御。

〈4〉安徳帝即位。

この中で『御幸記』の影響が顕著に確認できるのは、〈1〉、〈2〉の場面である。まず、〈1〉に該当する覚一本と『御幸記』の記事を確認する。

覚一本

同廿六日、厳島へ御参着、入道相国の最愛の内侍が宿所、御所になる。中二にち御逗留あつて、教会・舞楽おこなはれけり。A導師には、三井寺の公兼僧正とぞ聞えし。高座にのほり鐘うちならし、表白の詞にいはいはく、「九重の宮をいでて、八重の塩路をわきもつて参らせたまふ、御心ざしのかたじけなさ」とたからかに申されたりければ、君も臣も感涙をもよほされけり。大宮・客人をはじめまいらせて、社々所々へみな御幸なる。大宮より五町ばかり山をまはつて、B滝の宮へ参らせ給ふ。公兼僧正一首の歌ようで、拝殿の柱に書つけられたり。

雲井よりおちくる滝のしらいとにちぎりをむすぶことぞうれしき

B神主佐伯の景広、加階従上の五位、国司藤原有綱しなあげられて加階従下の四品、院の殿上ゆるさる。座主尊永、法印になさる。神慮もうごき、太政入道の心もはたらきぬらんとぞ見えし。

【御幸記】

廿六日、空の気色うら、かにて、神の心もうけ喜ばせ給にやと、恵みもかねてしるし。日さし出づる程に出でさせ給。

午の時に宮島に着かせ給。神宝の舟たづねらる。かねてまいり設けたるよし申。御やうじの舟しばらく待たる。空のけしき、所の有様、目も心も及ばず。大唐の怨寺かくやとぞ見へ、神山の洞などに出でたらん心地す。宮島の有の浦に神宝調へ立てて、御拝あり。(中略)

御神樂終りて、大宮へまいらせ給。御奉幣はてて、御経供養あり。金泥の法花経一部、寿量品、寿命経、御手自書かせたまひける。A御導師公顕僧正参て、此よしを申あげらる。九重の中を出でて、八重の潮路を分けまいらせ給御心ざしなど、聞く人も袖をしぼりあへず申あげらる。かづけ物一重一包をぞたまはりける。勳賞仰せらる。法眼一人なしたまふ。B神主景弘、位あげさせ給。宮島の座主、阿闍梨になしたぶ。安芸の守在経、加階一なしあげさせ給。院の殿上ゆるさる。

(中略)

廿七日に、空の気色うら、かに晴れわたりて、残りの鶯思はぬ深山の木蔭にかたらふ声す。夜をこめて潮満つとて、御所の前

までさし入りたる、まことにこの世の有様とも見えず。
 (中略)
 日も暮れにしかば、B滝の宮へまいらせ給。公顕僧正、歌よ
 みて書きつけける。

雲井より落ちくる滝の白糸に契を結ぶことぞうれしき

『御幸記』では、参着日二十六日と翌日二十七日に分散して載るA、Bの公兼僧正の詞と歌を、覚一本では二十六日にまとめて凝縮し掲載している。覚一本はへ1の場面の直後に、還御のため厳島を後にするへ2の場面を設定しており、覚一本が記す実質的な厳島での主な事柄が、公兼僧正の表白の詞と、摂社を巡る折の滝の宮での一首となる。延慶本などには見られない、具体的な高倉院の厳島での言動を『御幸記』を参考に記すことで、御幸の実情が明瞭化し事実性が深まる記事となるであろう。また、高倉院が遠方の厳島に御幸した事に対し、「九重の宮をいでて、八重の塩路をわきもつて参らせたまふ、御心ざしのかたじけなさ」(覚一本)という公兼僧正の詞に、「君も臣も感涙をもよほされけり」(覚一本)という状況を述べ、厳島に参着してもなお、高倉院一行にとつて讓位と西国厳島までの参詣が心痛であつた様子が、『御幸記』を引用する事によつて窺えるのである。

また、覚一本Bの「佐伯の景広」や「藤原有綱」の官位昇進についての記事であるが、官位については『御幸記』も記しており、前記した延慶本も同内容の記述を設けている。覚一本はこの官位昇格の文の締め括りに、「神慮もうごき、太政入道の心もはたらきぬらんとぞ見えし」の一文を置く。この一文は『御幸記』にはない記述であるが、前述した延慶本の引用箇所傍線部に「神慮ニモ相応シ、入道ノ心モ和ギヌトゾ見エシ。」という相似の文言が確認でき

るため、巖島参着後を僅かに記すのみの延慶本の記事に依拠し、引用した一文であると判断できる。この一文は、前半「巖島御幸」を通して覺一本が主張し、高倉院巖島御幸の本来の目的とする「入道相国の謀反の心をもやはらげ給へとの御祈念のため」(覺一本)に、反映する一文だと考えられる。延慶本など『平家物語』諸本は、高倉院の巖島御幸の主因を後白河救済のため、清盛の心を緩和することにあると主張し、その傾向を覺一本も倣っている。清盛の心中を和ますという事情が前提にあるため、へーの場面はほとんどを『御幸記』に依る記事としながら、官位昇進の記述に、部分的に清盛の心情に言及する一文を、敢えて諸本から取り込み加えたのであろう。父後白河の解放を祈念する高倉院の願いが、巖島御幸の目的であることを覺一本は意識し、諸本に従いながら指摘しているのである。

(五) 還御の道中

次に、へ2の場面について考えていきたい。以下にへ2の該当場面、巖島から都に還御する三月二十九日と、帰京の道中である四月一日の記事を並べる。

覺一本

同廿九日、上皇御舟かざって還御なる。風はげしかりければ、御舟こぎもどし、巖島のうち、ありの浦にとまらせたまふ。

C上皇、「大明神の御名残おしみに、歌つかまつれ」と仰ければ、

隆房の少将、

【御幸記】

廿八日、「このわたりの浦を御覧すべし」とて、海人ども潜きさせ給。(中略)

明くる辰の時に又御宮廻りありて、やがて御船にたてまつる。島の中にもおどろしく騒ぎあいたり。内侍ども汀に出でて、

たちかへるなごりもありの浦なれば神もめぐみをかくるしら浪

夜半ばかりより浪もしづかに、風もしづまりければ、御舟こぎいだし、其日は備後国しき名の泊につかしたまふ。此ところはさんぬる応保のころほひ、一院御幸の時、国司藤原の為成がつくつたる御所のありけるを、入道相国御まうけにしつらはれたりしかども、上皇それへはあがらせたまはず。

D「けふは卯月一日、衣がへといふ事のあるぞかし」とて、おのくみやこの方を思ひやり、あそびたまふに、D岸にいろふかき藤の松に咲きかゝりたりけるを上皇観覧あつて、隆季の大納言を召して、「あの花おりにつかはせ」と仰ければ、左史生中原康定が、はし舟に乗つて御前をこぎとをりけるを召して、おりにつかはす。藤の花をたをり、松の枝につけながら、もつて参りたり。「心ばせあり」など仰られて、御感ありけり。「此花にて歌あるべし」と仰ければ、隆季の大納言、

千とせへん君がよはひに藤なみの松のえだにもかゝりぬるかな
其後、御前に人々あまた候はせたまひて、御たはぶれごとのありしに、上皇、「しろさきぬ着たる内侍が、国綱卿に心をかけたるな」とて、わらはせおはしましければ、大納言大にあらがい

何となく日來のなごり、しのび思ひたる気色なり。C「なごり多きよしの歌つかふまつれ」とありしかば、

たちかへりなごりもありの浦なれば神もあはれをかくる白浪風も静かに、物のあはれも春深くなりける気色、思ひかけぬ鳥の上に、桜の散りがたになりたる見ゆ。いみじくをかしくおほえしに、三月尽になりけり。「今日はいかで旅の泊とても、春を惜しまざらん」とて、人く文作る。もてなし興せさせ給べきにもあらず、何の映へもおほしめされず。理とぞ見たてまつる。

D四月一日になりぬれば、今日は衣更などといふことぞかしと思ひやらる。まだ陰りたれど、雨やみにたれば、舟ども溱を出したりしかば、浦く泊くうち過ぎつ、やうく宮こ近くなる心地して、旅のなごりもおほえず、疾くく過ぎさせ給。

D向への岸に色深き藤、松の緑に咲きかゝりたるを御覧じて、「あれ取りにつかはせ」と仰せられしかば、庁官康貞端舟にて通りしを、召しとめてつかはす。丘の上に登りて、松の枝にかけて持てまいる。「心ばせあり」と仰せられて、「そのよしの歌つかふまつれ」と仰せありしかば、

千歳へむ君がかざしの藤浪は松の枝にもかゝるなりけり
空晴れて日ざしあがる程に、我もく舟ども帆うちかけて、

申さるゝところに、ふみもつたる便女がまいつて、「五条大納言
殿へ」とてさしあげたり。「さればこそ」とて、満座興ある事に
申あはれけり。大納言これをとつて見たまへば、

雲の波煙の波を分けて走りあひたり。備前国内海通らせたまふ。
日入りがたに、児島に着かせたまふ。

しらのみの衣の袖をしほりつ、きみゆへにこそたちもまはれぬ
上皇、「やさしうこそおほしめせ。この返事はあるべきぞ」とて、
やがて御硯をくださせ給ふ。大納言返事には、

おもひやれ君がおもかけたつなみのよせくるたびにぬるゝたも
とを

それより備前国小島の泊につかせ給ふ。

『御幸記』では作者通親自身が詠じたとして、C、Dの場面に二首の歌が載るが、これらの歌をほとんど同じ形に、
覚一本は取り上げている。ただ、覚一本はCの名残の歌を降房に、Dの藤の歌を降季に、それぞれ歌の作者を通親か
ら変更している。覚一本Cの歌は、厳島を出発した高倉院一行が、直後、激しい風に遭い船着き場の「ありの浦」（有
の浦）にて留まる間、「大明神の御名残おしみに、歌つかまつれ」という高倉院の仰せに従い、降房が詠じたもので
ある。有の浦は厳島に参着した際、「神宝調へ立てて、御拝あり」と『御幸記』が記した船着場であり、厳島に到着
した場所から、今また還御しようとする時に、名残の歌を高倉院が命じたのである。覚一本では風を待つ間の高倉院
の発言としているが、『御幸記』には出立の際に風を待つ記述はなく、さらにCの歌を命じる言葉が「なごり多きよ
しの歌つかまつれ」とありしかば（『御幸記』）と、高倉院が主語の際の、「仰せ」という尊敬語が使用されていな
い。そのため、通親と同じ随行の臣下が名残の歌を求め、それに対して通親が答えたとも考えられる。さらに、『御

「幸記」では「内侍ども汀に出でて、何となく日來のなごり、しのび思ひたる気色なり」と、見送りに集まる内侍らの様子が描かれた直後に、名残の歌のやり取りがある。高倉院一行が送別に集まった内侍らに対し、僅かな滞在ではあつたが、嚴島を離れる寂しさを詠じた歌だと考えられる。覚一本ではCの名残の歌を、「上皇、「大明神の御名残おしみに、歌つかまつれ」と仰ければ」と、高倉院が指示した歌とし、また「平家物語」中、頻繁に登場する隆房に歌の作者を置き換えている。覚一本は、本来「御幸記」にあつた通親が詠む名残の歌、「たちかへりなごりもありの浦なれば神もあはれをかくる白浪」の「神」の言葉に着目し、「御幸記」にはなかつた「大明神の御名残おしみに」という発言をさせ、高倉院の言葉を介して、嚴島明神を意識する高倉院像を明確にしているであろう。この度の嚴島御幸が、嚴島明神への祈念であるという、高倉院の目的意識を明瞭化しているのである。「御幸記」の名残の歌を取り込み、嚴島明神を意識する高倉院の発言から導き出された歌として、嚴島明神への祈願という点をここでも主張していると考えられる。

Dの四月一日に詠まれる藤の歌は、前述した通り覚一本では隆季が詠じた歌である。しかし、歌の作者こそ相違しているが、岸に咲く色深き藤の花を摘みに行った康定が、松の枝に引つ掛け持参した振る舞いに対し、高倉院が「心ばせあり」と感心する様子など、場面全体の描写は、ほとんど「御幸記」に依つたものである。高倉院の仰せにより、藤の花を詠む歌が一首置かれるが、高倉院の齢を千年もと願う祝賀の歌となっており、「御幸記」では、花や枝を折り髪や冠に挿す挿頭（「かざし」）を、覚一本では「よほひ」と、直接的な表現に改めている。嚴島を発ち都へ向かう還御の道中、人々は「やう／＼宮こ近くなる心地して、旅のなごりもおほえず、疾く／＼と過ぎさせ給」（「御幸記」）と、帰京を心待ちに、逸る気持ちを押さえながら船上で過ごしていた。藤の花を題材に、さらに高倉院の祝賀の歌を詠むなど、高倉院一行の雰囲気や穏やかである様が窺える。待ち構えた帰京に際し、遙か嚴島まで御幸となつた心痛

が徐々に和らぎ、慣れ親しんだ懐かしい都に近づく安堵感が、Dの場面に見られる祝賀の歌を導いたのである。都から厳島に向かう心細さとは対照的な、都に還御する喜びが齎したのどかな時間を、「御幸記」に倣いながら覺一本は設定したと考える。

さて、覺一本はDの場面に続けて、点線で示した独自の記事を設けている。この記事も、(二)で論じた踐祚記事に見られる内侍の独自記事のように、読み本系諸本でも覺一本と百二十句本のみの記述である。厳島御幸に随行した臣下の国綱と、厳島の内侍との恋愛記事であり、両者の歌のやり取りも描かれるが、直接に還御の章段に関連する重要事項ではない。その点も、(二)で触れた独自記事と共通する点である。「還御」の独自記事の後、高倉院一行は「小島の泊」に船を着け、数日滞在したとするが、『御幸記』もDの場面で藤の歌を詠じた後に、「児島に着かせたまふ」という記述があり、児島に到着するまでの場面として覺一本が独自に国綱の記事を挿入している。「還御」の章段に関する主要な内容ではないが、この覺一本の独自の記事に、高倉院の一面面を垣間見る事が出来る。臣下の国綱に思いを寄せる内侍の事を、「しろききぬ着たる内侍が、国綱卿に心をかけたるな」と、高倉院は笑いながら国綱をからかい、また、内侍から贈られた歌を「やさしうこそおほしめせ。この返事はあるべきぞ。」と、国綱に返事を促したりする様子がある。国綱をからかう高倉院には気さくな印象が窺え、高倉院と臣下達が打ち解けた間柄にある事が想像できる。高倉院と随行する臣下たちとの、寛いだ和やかな雰囲気が見受けられる記事であろう。覺一本は国綱と内侍の和歌のやり取りを通して恋愛を描き、藤の歌詠みに続いて、都への帰路の喜びが反映するような、明るさが漂う場面としているのである。前半「厳島御幸」の独自記事を中心とする場面は、讓位する高倉院の身近な者達の悲哀が感じられる踐祚の儀式の中で、年配の内侍が高倉院の内侍として役に就く事を拒否するなど、讓位する高倉院に伺候する者の不安や悲嘆を通して、また、物語の展開が西国厳島までの前途不安な御幸に至るまでの、暗澹たる雰囲気醸し出

す場面であつた。その前半とは対照的に、後半「還御」の独自記事は、「御幸記」で通親が記したように、待ち構えた帰京を喜ぶ気持ち藤の花を題材に高倉院の慶祝の歌となり、その穏やかな状況をさらに引き継ぐ形で、覚一本が和やかな雰囲気の高倉院と臣下のやり取りを描き、男女の恋歌を掲載するなど比較的潤色された明るい場面となっているのである。

(六) おわりに

以上、高倉院厳島御幸記事について、覚一本を中心に「御幸記」との比較を通してながらその特質を見てきた。覚一本の厳島御幸記事は、前半「厳島御幸」と後半「還御」の二章段から成り立っており、前半「厳島御幸」では、「御幸記」に依つて設けた踐祚の記事を通して、高倉院の身近な者達の様相を描き、清盛政権下で苦難する高倉院の姿を同情的に描く傾向がある。また、その傾向は「御幸記」のみに依拠するのではなく、「平家物語」読み本系諸本からも、史実性を問わず高倉院と父後白河法皇の再会記事を取り込むなど、御幸前の重要な事柄として、高倉院の痛ましさが際立つ父子の再会場面に筆を費やしている。その中で、覚一本は諸本から知り得る事が不可能であつた踐祚記事を、「御幸記」から取り上げ、御幸前の皇位継承を巡る高倉院の不憫さを、詳細に描き出そうとしているのである。一方、後半「還御」の章段は、延慶本などが簡潔に記すのみであるため、厳島参着後から現地での具体的な様子など「御幸記」に倣つて記しており、その「還御」の章段を設ける事で「平家物語」諸本中、覚一本が最も詳細に高倉院の厳島御幸を記す事になるのである。厳島現地での出来事は「御幸記」に依るものであるが、その中でも(四)に見てきたように、簡約して記す延慶本の官位昇進の記事から、清盛の心中に言及した一文を付け足すように、また、厳島から

都に出立する場面で、高倉院が「大明神の御名残おしみに」という言葉を発するように、高倉院の巖島御幸の目的が、清盛の信仰篤い巖島明神へ父後白河法皇の解放を祈念するためであり、覚一本はその御幸の目的を物語中で一貫して主張しているのである。

巖島御幸が決定し都を出立するまでの前半は、高倉院の気の毒な状況を強調するように、悲哀感が漂う物悲しい雰囲気となっており、さらにその重々しい雰囲気を高めるかのように、「御幸記」から取り込んだ踐祚の場面が設定されている。そして、後半では待ち構えた都への還御を喜ぶように祝賀の歌を詠じる場面を「御幸記」から取り入れ、高倉院や随行の臣下も含めた帰京の喜びが伝わるように、前半「巖島御幸」とは違って僅かな時間ではあるが、明るい穏やかな一時の訪れを描き出そうとしている。覚一本の高倉院巖島御幸記事が、「御幸記」を参照に設定した場面や、取り込んだ記事が随所に確認出来る事は、これまでの研究者によつて多く立証されてきた事であった。しかし、覚一本巖島御幸記事の全体を通してみると、「御幸記」だけを中心に資料に用いるのではなく、特に前半「巖島御幸」に關しては「平家物語」諸本から多くの記事を受け継ぎ、巖島明神への高倉院の祈願や、清盛を憚る高倉院に同情的な面を覚一本が倣い、物語中で巖島御幸の目的として主張しているのである。諸本の傾向を受け継ぎながら、さらに「御幸記」を参考に取り込む事で、高倉院の巖島御幸の史実性を深める事はもちろん、「御幸記」から知り得た高倉院やその身近な者達の言動や心中が描かれる事で、覚一本が主張する高倉院への同情や、巖島参詣の目的がより一層明確になると考えられるのである。

注

(一) 主な記事に「玉葉」、「明月記」、「山槐記」の〔治承四年二月廿一日条〕、〔治承四年三月十七日条〕、〔治承四年三月十九日条〕、

〔治承四年四月九日条〕などに、また「百鍊抄」〔治承四年三月廿一日条〕、〔治承四年三月十九日条〕に高倉院の讓位、言仁親王の踐祚、高倉院嚴島御幸についての記事が見られる。

(2) 赤堀又次郎氏「平家物語解題」(校訂標註平家物語)、平民書房、一九〇七年七月)。

(3) 文部省内国語調査委員会編纂「平家物語考」(勉誠社、一九六八年六月)。

(4) 後藤丹治氏「戦記物語の研究改訂増補」(大学堂書店、一九四四年二月)。

(5) 水川喜夫氏「源通親日記全釈」(勉誠社、一九七八年十月)。

(6) 小川剛生氏「高倉院嚴島御幸記」をめぐって」(明月記研究)第九号、二〇〇四年十二月)。

(7) 本文の引用は以下のテキストを使用し、適宜傍線、点線を施した。

○「平家物語」覚一本：「新日本古典文学大系 平家物語」(岩波書店)。

○「高倉院嚴島御幸記」：「新日本古典文学大系 中世日記紀行集」(岩波書店)。

(8) 延慶本：「延慶本平家物語」(勉誠社)。

(9) 「徒然草」：「新編日本古典文学全集 方丈記 徒然草 正法眼藏隨聞記 歎異抄」(小学館)。

(10) 「中務内侍日記」は鎌倉時代中期、第九十二代伏見天皇に内侍として仕えた女房、高倉(藤原)永経女経子の回想假名日記。弘安三年から正応五年に至る、後深草・龟山兩皇統対立期を背景に、十三年間の宮廷出仕時代を随想したもの。たとえば、弘安十年伏見天皇踐祚の章段に、「播磨中将具頭の死」を記した挿話があり、踐祚の儀を最も楽しみにしていた播磨中将具頭が、踐祚の儀の渦中に病死した事を綴っている。青木経雄氏・渡辺静子氏「中世日記紀行文学全評釈集成第五卷中務内侍日記竹むきが記」(勉誠社、二〇〇四年十二月)中で、「中務内侍日記」「播磨中将具頭の死」の章段を「はさみこみの文章」と表現し、「どうしても書かずにはいられなかった心の友の一人の死であった。」と指摘されている。踐祚の直接的な事柄ではないが、踐祚に関連する者の表出ししない公的行事の背景があった事を知る事ができる。また、即位御幸の儀で、璽の役に就いた作者に対し、時の関白師忠が持ち方などを細かに指導してくれた事情などが記されている。

(11) 覚一本巻第三に、高倉院中宮徳子皇子(後の安德帝)誕生にあたる「御産」「公卿揃」に続いて「大塔建立」の章段が載る。覚一本は「大塔建立」の中で、「此御むすめ後に立たせ給しかば、入道相国夫婦共に、あはれいかにもして、皇子御誕生あれかし、位につけ奉り、外祖父、外祖母とあふがれんとぞねがはれける。わがあがめ奉る安芸の嚴島に申さんとて、月まうで

を始て、折り申されければ、中宮やがて御懷妊あつて、思ひのごとく皇子にてまし／＼けるこそ目出たけれ。」と、徳子の懷妊、皇子誕生が清盛夫妻の巖島祈念によつて齎されたとし、引き続き、清盛の巖島信仰由縁説話を語る。巖島信仰説話は「古事談」に確認できる高野信仰と関連せしめた伝承であり、ほとんどの「平家物語」諸本が掲載する。高野山の大塔建立の際に奇異な気配を持つ老僧が現れ、巖島の再建を清盛に依頼するといった内容もほぼ同一のものである。高倉院中宮徳子の懷妊、出産、皇子誕生は清盛の篤い巖島信仰のもとに、巖島大神人の利生によるものと語る皇子誕生関連説話として、もう一方は、清盛によつて鳥羽殿に幽閉されている父後白河法皇を思う高倉院が、先例を破つてまで清盛の信仰が強い巖島へ参詣する、巖島御幸と関連しての二つの形式があり、覚一本は前者に、延慶本は後者に含まれる。

(12) 「玉葉」治承四年三月十六日条に、以下の記事がある。「明日巖島に御幸あるべし(中略)人伝へて云はく、明日の御幸延引し了んぬ。山の大家蜂起する間、忽然として延引す。」続けて翌日三月十七日条には、「園城寺の大家発起し、延暦寺及び南都の衆徒を相語らひ、法皇及び上皇の宮に参り、阿主を盗み出し奉るべき由、去る八日評議をなす。」との記事が確認できる。先例にない、異例とも言える巖島御幸に対して、山門大家が抗議反発し、御幸が延期になつていた事情が知られる。

(13) 佐伯真一氏・高木浩明氏編著「校本保暦間記」(和泉書院、一九九九年三月)。

(14) 佐伯真一氏「保暦間記」の歴史叙述(「伝承文学研究」第四六号、一九九七年一月)。

(15) 五味文彦氏「書物の中世史」(みすず書房、二〇〇三年十二月)に「たちかへるなごりもありの浦なれば神もめぐみをかくるしら浪」の作者が、「平家物語」では通親から隆房に変更している事に、「このことは隆房が『御幸記』の作者として伝えられていたことを意味するものであって、」との指摘をされ、「御幸記」の作者が通親ではなく、隆房の可能性もあると考えておられる。他に、隆房の「安元御賀記」や「艶詞」と、「御幸記」との類似性などを取り上げており、「御幸記」自体を、当初は簡略な記録に多くの記事が付加され現在の形となり、「隆房が記した何らかの記録にもとづいて、鎌倉中後期の頃に成りたったものと考えておきたい。」との見解を示しておられる。

(16) 「高倉天皇御幸記」曰三月廿八日還幸の御ふねたてまつる内侍ども汀に出て何となく日比の名残しのび思ひたる気色なり。名残多きよしの歌つかふまつれとありしかば

立帰る名残も有のうらなれば神もめぐみをかくるしら浪

風もしつかに物のあはれも春ふかくなりけるおもひかけぬ鳥のうへに桜のちりかたになりたる見ゆ。いみしくおかしくお

ほえて三月尽になりけりと云云

右の歌平家物語には隆房少将とあり。隆房は帥の大納言隆季の男右中将の後令泉大納言と云ひしなり。」(「嚴島道芝記」巻第四有の浦)。「嚴島道芝記」有の浦の項に右に挙げた「御幸記」に依る記事と、「平家物語」では隆房が作者となっている事を指摘する記事が確認出来る。しかし、「嚴島道芝記」が記す歌は「神もめくみを」となり、これは「平家物語」の言葉で、「御幸記」では「神もあはれを」となっている。歌の前後の文章は、「御幸記」に依るものであるから、「平家物語」の歌と混合したものだと思われる。